

小学校音楽科における主体的に鑑賞する児童の育成

— 言語活動の充実と ICT の効果的な活用 —

M18EP011

保坂 直行

1 研究の目的

本研究は、小学校音楽科における主体的に鑑賞する児童の育成に向けて、言語活動の充実と ICT の効果的な活用に焦点を当て、そのはたらきかけを検討するものである。

これまで私は、鑑賞指導における難しさを、音や音楽が時間と共に消えてしまう音楽の特性に拠るところと感じてきた。それは、児童が鑑賞曲から気付いたこと（知覚）や感じたこと（感受）を〔共通事項〕を要とし意見交換する際には、音や音楽は既に消えており、また視覚的にも確かめることができない状況にあるからである。そのため、根拠（音や音楽）の共有は頭の中に流れる記憶を頼りとした不確かで曖昧な共有となり、意見交換にあまり深まりが見られないと感じてきたからである。

鑑賞の学習において、児童は1・2時間扱いといった限られた授業時間の中ではじめて楽曲に出合い、その楽曲を通して児童の思いや意図を出し合い、共有したり、より深く味わったりすることが一般的な展開である。そのため、授業のはじめに楽曲を数回聴いた中では、主な旋律は頭に残っていても、楽曲全体の構成だったり、微妙に変化している旋律までは記憶できなかったりするのではないだろうか。仮に歌詞の付いた楽曲であれば、歌詞を手掛かりに意見交換の根拠となる旋律を伝えることができるが、多くの鑑賞教材においては、それもないため難しい。また、教科書等を用いて学習する際は、紙面に主な旋律の冒頭部分の旋律や図形譜が示されているものの、児童によっては、音や音楽を聴きながら旋律を目で追うといった聴取と読譜

の能力を対応させることに課題を抱えている児童もいる。そのため教科書等に示されている旋律や図形譜を指や目で追うことが難しかったり、紙面に示しきれない旋律を根拠に説明したりする際には、どの旋律のことかを共有することができず、話合いに深まりが見られない現状もあった。

そこで、本研究では、小学校音楽科における主体的に鑑賞する児童の育成に向けて、その具体的な「言語活動の充実」と「ICTの効果的な活用」の方策について検討し、よりよい鑑賞の授業の在り方について考えていく。

なお、本研究テーマである「主体的に鑑賞する児童」は、〔共通事項〕をもとにした表出された言語数と、授業における児童の学びの姿から検証していく。

2 研究の重点と検証方法

- (1) 「言語活動の充実」に向けて検討し、具体的な手立てを用いて授業実践を行う。また、授業ごとにワークシートを分析し、その有効性を検証する。
- (2) 「ICTの効果的な活用」に向けて検討し、教材作成を行い、授業実践を行う。また、授業における児童の姿を分析し、その有効性を検証する。

3 題材の計画と授業実践

(1) 授業実践

- ①対象 山梨県内公立小学校第3学年
1クラス（男子12名女子19名）31名
- ②日時 10・11月（計3時間）
- ③題材
○旋律の特徴を感じ取ろう

- ・鑑賞教材『メヌエット』（1時間）
ベートーベン作曲
- いろいろな音のひびきを感じ取ろう
- ・鑑賞教材『トランペットふきの休日』（1時間）
アンダソン作曲
- ・鑑賞教材『アレグロ』（1時間）
モーツァルト作曲

（2）題材及び授業の計画

音楽科の授業は題材を通して学習を展開し、表現領域と鑑賞領域を関連させていくことが重要である。それにより、児童が得た知識や表現方法が他領域等で活用され、児童の学びにより深まりが見られるものとなる。本来、そのような授業計画をし、実践すべきところではあるが、本件は実習校での限られた授業実践であることから、鑑賞の時間のみとし、3時間を対象とする。

4 研究の重点

（1） - ①言語活動の充実に向けて

『文部科学省（2016）次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）音楽科』に目を向けると、現行学習指導要領の成果と課題として、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと（後略）」とある。また、『文部科学省（2018）小・中学校指導要領 Q&A 音楽に関すること』の、「7-1〔共通事項〕が新設された趣旨、〔共通事項〕の指導の留意点」の問いに対し、「（前略）教師があらかじめ教えてしまうものではなく、児童が自分で発見し自分の言葉で言い表すようにしていくように指導することが大切。」とされ、「7-8 鑑賞の指導において、感じ取ったことを言葉で表す（小学校）、根拠をもって批評する（中学校）などの言語活動が位置付けられた趣旨と指

導上の留意点。」の問いに対しては、「小学校音楽科において鑑賞の活動を行う際、児童が聴き取ったことやそれらから感じ取ったことを言葉で表すなどして、自分の聴き取ったことや感じ取ったことを確認したり、友達と意見を交換したりすること等により、主体的な鑑賞活動が可能となります。（中略）指導に当たっては、教師が、「楽曲のどこからそのように感じたのか」などと問い掛けることによって、想像したことや感じ取ったことを言葉で表していく活動を設定することが大切です。児童が気付いたことや感じ取ったこと、心に思い描いた様子を言葉に表すなどして相手に伝えることによって、教師の発問と児童の応答の中などで一人一人の感じ方のよさを認め、友達の感じ方に気付いたり、自分の感じ方を広げたりするように指導することが大切です。」と説明がなされている。

これらからわかることは、新学習指導要領（平成29年）においても平成20年に新設された〔共通事項〕の扱いやそれを要とする言語活動の更なる充実が引き続き示されていることと、鑑賞の授業に期待する児童の主体的な活動である。言い換えれば、言語活動の扱いや鑑賞指導には未だ課題点があるため、このような記述があると考えられるのではないかと考える。そこで、私の感じている鑑賞活動の課題である音や音楽が時間と共に消えてしまうことを、ICT 機器の効果的な活用で補っていく。また、言語活動の充実については、更なる具体的な手立てから迫り、鑑賞領域の目標である児童が主体的に鑑賞し、音楽を味わうことのできるよう育てていきたいと考えた。

（1） - ②言語活動の充実に向けた手立て

私が考える鑑賞領域における言語化への課題は大きく2つある。1つは、〔共通

事項]を要とした意見交換に不可欠な「知覚したこと」と「感受したこと」を児童自身が使い分けられるようになることである。2つの違いを理解することは児童にとって大変難しいことと感じてきた。それは「感受したこと」を児童に馴染みのある言葉や理解しやすい言葉として「感じたことは何ですか?」と問うても、楽曲や旋律から感じたイメージや景色、「優しい感じ」等に代表される形容表現を使った気づきの事だけではなく、「音が大きくなった。」「音色が変わった。」等、「知覚したこと」も混在してしまうからである。そのため、児童にとってより分かりやすいものとなるよう、「知覚したこと」「感受したこと」を定義し、児童と共有したいと考えた。

<p>「感受したこと」</p> <p>①感じたことを表す言葉、 比喩する言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まるで～のようだ ・～な様子 ・～の時に合う ・～の時に聴きたい <p>問い：どのような場面に合いますか。</p> <p>：どのような気持ちになりますか。</p> <p>「知覚したこと」</p> <p>②音楽を形づくっている要素</p> <p>についての言葉 [共通事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音がだんだん大きくなっているから ・同じ旋律が繰り返されているから <p>問い：なぜ、①のように感じましたか。</p> <p>：①と考えた理由は何ですか。</p>
--

図1：音楽のことば

図1は、児童と共有した「音楽のことば」である。「知覚」は音楽を形づくっている要素を聴き取ることであり、学習すべき [共通事項] であるとともに、全員が共通して聴き取ることができるものである。対して「感受」は音楽の質感を感じ取ることであり、生活経験や既有知識から生まれる

ものとなるため、個人によって異なった感覚であり、表出される言語となる。

鑑賞の学習では「②音楽を形づくっている要素 [共通事項]」が同じであっても「①感じたことを表す言葉」が異なっていたり、「①感じたことを表す言葉」が同じであっても、その根拠となる「②音楽を形づくっている要素 [共通事項]」が人によって違っていたりする。その部分を他者と交流することによって、自分では気づかなかったことに気付いたり、楽曲の深い理解につながったりする。そのため、「知覚したこと」と「感受したこと」を児童が使い分けられるように指導していくことが大切だと考え、児童に馴染みある言葉となるよう、「音楽のことば」として定義し、授業ごとに意識させた指導を行うとともに、言語活動の充実への手立てとして用いた。

一方、上記の使い分けは簡単に行うことができるものではない。理由としては「知覚したこと」を正確に表現するには [共通事項] に関連する言葉を児童自身が身に付けていないとならない。また、児童が自らの考えを①②のどちらに当てはまるのか判断できないこともあるからである。そのため、正確に言語化できたり、判断できたりするように、更なる手立てが必要と考え、次の5点からアプローチを行った。

<p>A：授業中の発言を価値づけること</p> <p>B：ワークシートを分析し、 次時のはじめに指導すること</p> <p>C：一人ひとりのワークシートに コメントを入れ個別指導をすること</p> <p>D：ワークシートや板書を「音楽のことば」 に定義した①②の形式とし、一貫した 指導をすること</p> <p>E：曲の紹介文（ワークシート）では、例 を提示し、書き方がわからないことと ならないようにすること</p>

図2：言語活動の充実に向けた手立て

「A：授業中の発言を価値づけること」については、主に児童の発言の後に問い返しを行い、その児童の考えを全員が理解できるものとする事である。また、その際には「～ということですか。」と、教師が〔共通事項〕に関連させて問い返した。

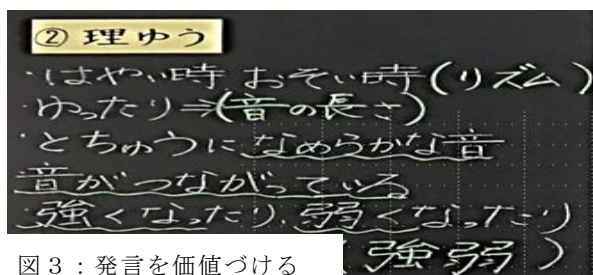


図3：発言を価値づける

図3は、『アレグロ』（モーツァルト作曲）の板書の一部である。児童は「はやい時とおそい時があった。」と発言し、教師の「何がはやかったり、おそかったりしたのですか。」の問い返しによって、曲全体のテンポではなく、リズムのことを意図していることが明確になった例である。同じように、「ゆったりしている。」の発言では、教師の問い返しによって、曲のテンポではなく、一音一音の音の長さであることを確認することができた。児童の発言は3年生という実態からも、まだまだ正確に自分の思いを伝えることは難しい。そのため、問い返しを行うことで、自分の思いを正確に表出する表現方法を知ると共に、〔共通事項〕に関わる知識を身に付けていけると考える。

「B：ワークシートを分析し、次時のはじめに指導すること」では、全員の記述から、定着具合を把握したり、児童に指導すべきことと私自身の授業改善につなげたりした。上記の図3のように、授業中において児童の発言をその場で価値付けしていくことは時間の関係からも全員に行うことは難しいため、ワークシートへの記述を分析が大切だと考えている。

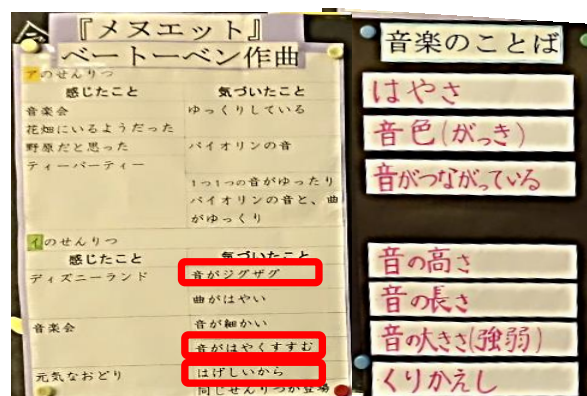


図4：正確に伝えるための指導

図4は、『メヌエット』（ベートーベン作曲）の学習後にワークシートを分析し、次時で行った指導資料である。全員のワークシートでは気づいたことの中に、「音がジグザグしている」「音がはやく進む」「激しいから」が多く見られ、それぞれは「何をさしているのか」を明確にしようと考え、取り上げる事とした。「音がジグザグしているは、音の高さのことですね。」「音がはやく進むは、曲のはやさのことですね。」「はげしいは、音の大きさ(強弱)のことですね。」と確認し、その書き表し方の指導を行った。また、アの旋律を聴いて、「ティーパーティー」と感じた児童が複数いたが、〔共通事項〕を根拠とする気づいたことは「バイオリンの音色」「一音一音のゆったりした動き」「曲のはやさ」と違うことを伝え、人によって感じ方が様々であることを知ることができるようにするとともに、感じ方は他者と違ってても良いのだという安心感を伝えようと考え、このような指導を行った。

「C：一人ひとりのワークシートにコメントを入れ、個別指導をすること」では、全体指導では行うことのできない、より具体的な指導を個別に行った。

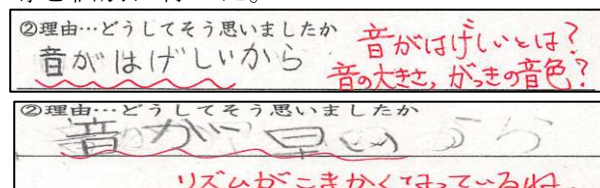


図5：ワークシートへのコメント

図5は、『トランペットふきの休日』（アンダソン作曲）のワークシートである。記述に対し、「音がはげしいとは？音の大きさ？楽器の音色？」と問い返すと共に、選択肢を提示している。また、「音が早い」の記述に対して、「リズムが細かくなっている」と、正確に表現できるよう、児童の記述を認めながらも修正を行った。

「D:ワークシートや板書を音楽のことに定義した形式とし、一貫した指導をすること」では、児童の思考場面や他者との交流において考えの相違点が明確になるように考えた。

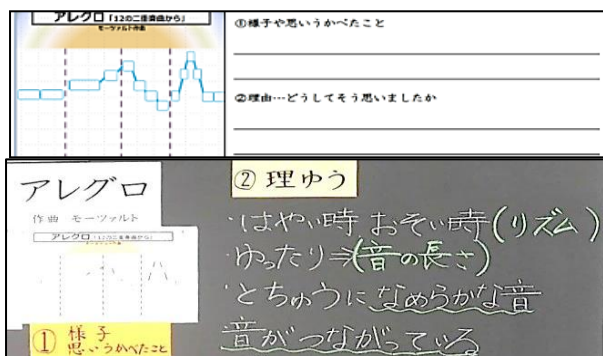


図6：ワークシートと板書の一体化

図6は、ワークシートと板書の形式に一貫性を持たせたものである。それにより、「感受したこと」「知覚したこと」を整理することができると共に、他者との交流において、その相違点が明確になるものと考えた。

「E:曲の紹介文（ワークシート）では、例を提示し、書き方がわからないこととならないようにすること」では、全3時間の授業実践に合わせ、段階的な指導を行った。

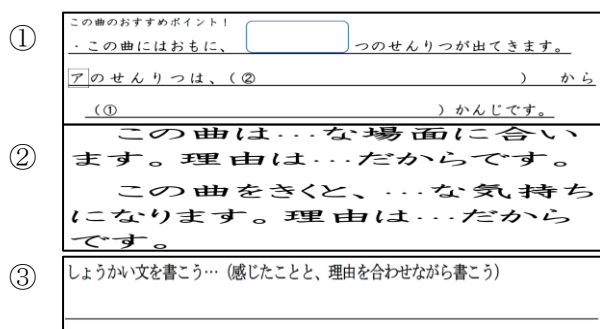


図7：曲の紹介文：段階的な指導

図7は、全3時間のそれぞれの授業終盤に行った曲の紹介文である。1時間目は児童にとっては初めての経験ということから、ワークシートや板書と対応させた①形式で行い、「知覚」「感受」をそのまま記入することができるようにした。しかし、児童によっては教師の提示する文章の枠では書き難い実態も感じたため、②のように文章例を提示することで2・3時間目は行った。3年生では国語科の学習において「感想の書き方」を学んでいる。②の文章例は国語科の教科書から引用すると共に、気付いたり感じたりしていることはあるのに書き方がわからないといったこととならぬよう配慮した。

(2) - ①ICTの効果的な活用に向けて

時得・小林・内海（2011）は、「音や音楽に含まれる要素や仕組みの特徴を楽譜や映像を通して可視化したり、言語や具体物などの可視化した情報を使って学習者が意見交換したりすることによって、児童が音楽を通じて思考・判断することができる」としている。また、音楽科鑑賞の授業においてもICTを使った授業展開ができるとし、その具体的な方法としては「曲をあらかじめ大きく部分に分けて、コンピュータで区切る施行をしておき、児童に聴かせた。」としている。先行研究からわかることは、音楽科の授業におけるICTの活用による可視化による可能性である。

先に述べたよう、私は音楽科の鑑賞領域の授業の難しさは大きく2つあると考えている。

音楽科鑑賞領域の授業における課題

- ア: 楽曲を聴きながら、教科書等にある旋律や図形譜を目や指で追うことができないといった技能に関わること
- イ: 音や音楽が時間と共に消えていくため、児童が意見交換をする際には根拠（音や音楽）がなく、曖昧な記憶を頼りとした音楽（旋律）の共有となること

そのため、ICT を使った可視化によって、その2つの課題を解決できるのではないかと考え、教材研究と手立てを考え、授業実践を行った。

(2) - ②ICT の効果的な活用への手立て

音楽科鑑賞領域の授業における課題アに挙げた、児童の技能面を補うために作成した音楽と旋律が一体となった動画教材である。

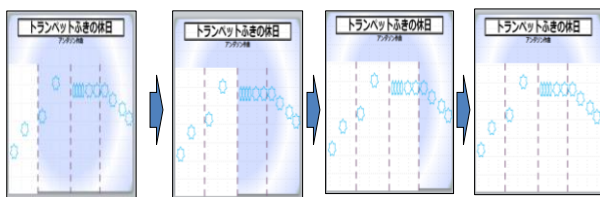


図8：視覚化教材① - 1 「同一画面内」

図8は、雨宮宏幸教諭の実践からその作成方法を習い、教材化したものである。大型画面に映し出された旋律の背景で、楽曲に合わせて長方形の帯が進んでいく。そのため、紙面を拡大し、それを教師が指示するのと同じ役割をコンピュータが行い、それを大型画面で自動的に視聴できるものである。

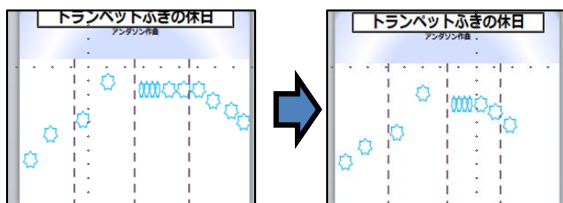


図9：視覚化教材① - 2 「前後の画面」

図9は、動画教材であり、前後の画面を比較したものである。次の旋律が変わる時に、音符を表す☆印が上下に移動したり、横に移動したりすることで、旋律の動きを視覚的に捉えることができるようになる。この動画教材を作成することにより、音楽科鑑賞領域の課題アとしてあげた児童の技能面に対する手立てとした。

音楽科鑑賞領域の授業における課題イに対する手立てとして教材作成を行ったのが、図10となる。

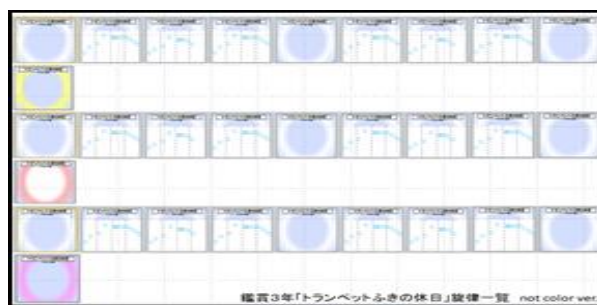


図10：視覚化教材②「旋律の一覧表」

図10は、動画教材として作成した全旋律を並べ、全曲を通した旋律の一覧表としたものである。授業においては、拡大して児童が見える所に張ったり、個人に配布したりした。それにより、楽曲を聴きながら、どの部分が演奏されているかを客観的に捉えることができたり、児童が気付いたことを旋律に対応させて記述できたりするようにした。また、他者との共有においては、「この部分」と指し示すことが可能となり、曖昧な記憶から、より正確に共有できる根拠として使用できる手立てとした。

5 研究の重点の検証

全3時間の授業実践を通して、研究の重点として挙げた「①言語活動の充実」「②ICTの効果的な活用」に対して、その手立てを児童のワークシートや学びの姿から検証していく。

(1) 「言語活動の充実」：手立ての検証

「言語活動の充実」に向けた5つの手立てを全3時間の記述分析から行った。方法は、学級全体の1時間ごとの言語数と、3時間を通した一人ひとりの記述の変容の2側面からの分析である。言語数は、〔共通事項〕に関わる、「知覚したこと」を比較していく。

◎〔共通事項〕が現れた言語数

⇒具体的であり、正確に伝わる表現

例：音が大きい。曲がはやくなった等

○〔共通事項〕に繋がると期待する言語数

⇒人により、捉え方に差異を生じる表現

例：激しい（強弱 or 音色）

ゆったり（はやさ or 音色 or 音の長さ）

△具体的でない言語数

⇒「知覚」ではなく、「感受」の言語数

⇒「知覚」「感受」が同じである言語数

⇒記述なし

例：激しいのは怖いと感じたから等

表1：1時間ごとの言語数の推移

	第1時	第2時	第3時
◎	14名	21名	28名
○	4名	5名	1名
△	12名	5名	2名
計	30名(欠1)	31名	31名

表1は、第1～3時までの記述数を分析し、表にしたものである。表1から言えることは、「◎〔共通事項〕が現れた言語数」が時間を追うごとに増加していることと、「○〔共通事項〕に繋がると期待する言語数」や「△具体的でない言語数」が第3時に向けて減少したことである。そのため、手立てとして講じた5つは、一定の効果があったと言えるのではないかと考える。

表2：個人内の言語数の推移

◎が増加	24名
◎がほぼ同数	4名
◎が減少	3名
計	31名

表2は、31名それぞれの第1時～第3時までの「◎〔共通事項〕が現れた言語数」の推移を分析し、表にしたものである。それぞれの時間においては、鑑賞している楽曲が違うため条件を揃えた比較はできないものの、言語数の増加が大多数の児童において見られる結果となった。このことから、言語活動の充実に向けた5つの手立ては、児童にとって効果的であったと言えるのではないかと考える。

いかと考える。

(2)「ICTの効果的な活用」：手立ての検証

「ICTの効果的な活用」に対する手立ての検証としては、授業場面における児童の姿から検証を行う。

「旋律の一覧表（拡大）」の効果が見られたのは、第3時『アレグロ』（モーツァルト作曲）においてであり、それは児童同士の学び合いへとつながる場面であったと考える。

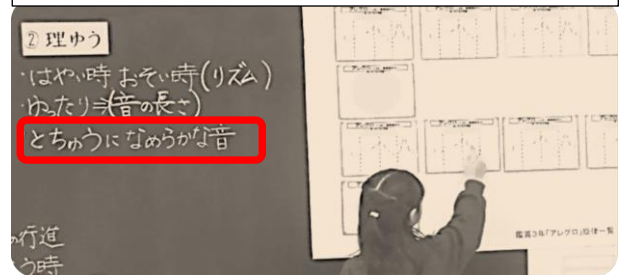
C1：途中でなめらかになっている。

T1：「途中」とは、どの部分ですか。もう一度曲を流しますので、「途中のところ」で手を挙げて下さい。

C2：「ここ！」（曲に合わせて挙手）

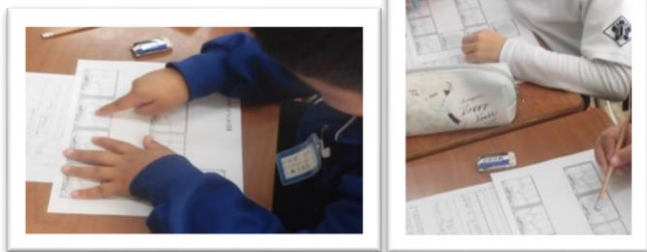
C3：あー。（一部の児童が反応）

T2：「あー。」とわかった人、どこの部分ですか。教えて下さい。



上記のプロトコルと写真から分かることは、音や音楽が消えていく音楽科の課題に対し、児童が根拠（旋律）をもって説明し、全員が共有することができた場面である。C1の「途中」という一見曖昧な言葉に対し、T1の「曲に合わせて手を挙げて下さい」の問い返しでは、児童の一部しか理解することができなかった。しかし、手を挙げるC2を見て「途中」を理解した児童が、C1の意見の根拠となる「途中」を旋律の一覧表（拡大）を用いて指示したことで、学級全員の理解を促すことにつながった。このことから、ICTの効果的な活用として図形譜を一覧表として用いたことには一定の効果が見られたと言えるのではないかと考える。

また、旋律一覧表を指で追う姿や、それをもとに意見交換をする姿も見られたことは、児童にとって思考を促すことにつながっていたのではないかと考える。



6 考察

研究の成果としては、「言語活動の充実」に向けた手立ては〔共通事項〕の表れた言語数を学級全体の推移、一人一人の個人内の推移を分析から、一定の効果は見られたと考える。また、「ICTの効果的な活用」に対しては、児童の学び合いの姿や、資料を活用する姿から、効果的であったとすることができると考える。

しかし、授業においては、「言語活動の充実」、 「ICTの効果的な活用」の他にも手立てを講じており、第2・3時においては、児童の実態から、問題解決型の授業へと展開の変更を行っている。それは児童同士の意見の交流を、より焦点化したものとし、それぞれの意見の差異を比較しやすいものとしたためである。そのため第2・3時の授業展開では、はじめに楽曲を聴いた後に「感受したこと」を学級で確認し、全員の共通する「感じたこと」を見出し、そこから「なぜ～と感じたのだろう」と課題を設定しての学習展開としている。それにより、児童にとって解決すべき課題が全員共通のものとなった。また、授業のねらいが「感受したこと」の理由探しとなる「知覚したこと」となり、授業展開がシンプルでわかりやすいものになったと考えている。そのようなことから、手立てとして講じた「言語活動の充実」「ICTの効果的な活用」が、そのまま〔共通事項〕の言語化とは

言い切れないところではある。

今年度の研究は限られた授業実践を通して行ったため、「表現領域」と「鑑賞領域」を相互に関連させて題材を通した学びとすることはできなかった。そのため、2年次においては「表現領域」で学んだことが「鑑賞領域」の学びに生かされたり、次の題材につながったりするような題材計画と実践を行い、児童にとって、よりよい学びの過程となるようにしていきたい。また、本研究は次年度も継続して行うものとなる。そのため、小学校音楽科における主体的に鑑賞する児童の育成に向け、さらによりよい授業の在り方を模索していきたい。

7 引用文献

- ・雨宮宏幸（2016）授業実践資料
- ・国立教育政策研究所（2012）「小学校学習指導要領実施状況調査 教科別分析と課題（音楽）」http://www.nier.go.jp/kaihatsu/sido_h24/05.pdf
- ・文部科学省（2016）次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）-（7）音楽、芸術（音楽）http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_5.pdf
- ・文部科学省（2017）新学習指導要領小・中学校新学習指導要領 Q&A-7 音楽に関すること http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/07.htm
- ・時得紀子 小林田鶴子 内海昭彦（2011）「ICTを活用した音楽学習の一考察」『上越教育大学研究紀要 第30巻』p. 271